

双子マスターカルデアにジオウが来たようです。

木綿豆腐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何番煎じかわからないがとにかくやってみたかった。ただ、それだけ。

やつてみたいことをやつてるだけだからお話は当たり外れの差が大きかつたりする。

目 次

双子マスターカルデアにジオウが来たようです。
じいさんはご飯を食べるようです。

双子マスターのフレンドに救世主が来たようです。
オーマジオウはひ孫に甘いようです。

姉マスターは壊れているようです。

夏休み特異点【駄菓子屋オーマ】

幕間の物語

トリニティ。①

37 31 25 21 16 7 1

双子マスターカルデアにジオウが来たようです。

「……これで、最後の呼札だな…」

「石は使うなつてエミヤに言われちやつたしね…」

「だ、大丈夫ですよ先輩方！きつと新しいサーヴァントの方が来てくださるはずです！」

ここはカルデアの召喚施設。

曜日クエストで貯めたマナプリズムを呼札に変換した男主人^{リッカ}と女主人^{立香}公は5枚のうち4枚を麻婆豆腐に変えてしまうという未曾有の事態に絶望してた。

「ダメだよ…だつてこの流れだとまた麻婆豆腐が来るんでしょ…知ってる」

「やだ…私たちの幸運值…低すぎ…？」

「ええと…その…」

もはやみんなの後輩、マシユ・キリエライトもフォローが間に合わない。

もはやクー・フーリンが他人事とは思えない。

ある意味自害と何ら変わりない爆死を繰り返し、その度麻婆豆腐の辛さと世の中の不条理に涙して来た。

なぜ、何故我々は麻婆豆腐にここまで苦しまなくてはいけないのだろうか。

背後霊があの愉悦神父なのだろうか。

「マシユ、頼みがある」

「は、はい！何でしようか…つ?!こ、この姿勢は少々照れ臭さを感じます…！」

突然、リツカが立ち上がり壁際までマシユに詰め寄った…平たく言つてしまえば壁ドンである。

「わたしも、いいかな？」

「ひやあっ！せ、先輩!？」

まるで滝を登る鯉のようにマシユの下半身を抱きめつつも上半身まで登る立香。

「「自害しそうになつたら止めてね」

「そ、それは勿論！ですがこのようなことをする必要性はあつたので
しようか！」

「…あー。いいからさつさと召喚しようぜ？ いつまでそれやつてん
だ」

茶番^{コント}に歯止めが効かなくなつて来そうな雰囲気を察知したのはキヤ
スターのクー・フーリンだ。

彼はマシユたちの最初の冒険の時からずつと一緒に、傷つきながら
も戦つて来たカルデア一番の古株である。

召喚施設に同行しているのも彼らを案じているからに違いない。

また、彼自身フレンドリーな為、マスターたちが新規サーヴァント
とのコミュニケーションに詰まつた場合のフォローを任せている。
「…ふう、落ち着いた。ありがとうマシユ。キヤスクーちゃんも」

「ありがとねマシユ、キヤスニキ」

「キヤスニキはともかく、キヤスクーちゃんはやめてくれねえカリッ
カ！」

食い気味のツッコミだが顔は笑つていて。

それはこの場にいる全員に当てはまることがだつた。

人理焼却の危機が迫つて いるとはいえ、ずっと神経を張り詰めてい
ては、いずれ何処かでパンクしてしまう。

それがレイシフト先で起こつてしまえば、どれ程の危険に見舞われ
るか分かつたものではない。

息抜きというのほどても重要なことである。

「よし、それじゃドンデン返しを期待して回そうか！」

「それは言つたら起こらないタイプのフラグなのでは我が弟よ！」

「ハツ！」

クスツ、と笑いが溢れる中、
和かに、ゆるーく召喚が行われる。

(これなら仮に麻婆豆腐が現れてもあいつらは精神を保つていられる
だろな)

(これなら先輩方も大丈夫そうですね)

爆死のショックで自害しようとする彼らを止めるのはいつも
キャスターのクー・フーリンとマシューの役目であるが、今回はその必
要は無さそうで一安心。

……そう、思つたのがいけなかつたのか。

「星5確定演出だああああああああ!!」

「!？」

マシューの盾の上で旋回する三つのリングが虹色に輝き出している。
これは、ジャック・ザ・リッパーやアルテラを召喚した際にも現れ
た現象。

「おいおいおいおい…！今があいつらにやそりや逆効果だろ…！」
「まさかこれまでとは真逆の理由で止めに入る事象が存在するとはお
もいませんでした！」

興奮死。マシューとクー・フーリンの脳内にこの単語がよぎる。

初めての星5はジャック・ザ・リッパーだったが、その時はまだレ
ア度の基準をよくわかつていなかつた為そこまで大事にならず、アル
テラを引いた時は敵対してすぐに召喚したので気まずい空気により
有耶無耶に。

今回は……流石にアルテラと同パターンはないだろう。確率的に。
「いいか嬢ちゃん。今のうちに医務室に連絡しておけよ。万が一あい
つらが倒れるようなら、サーヴァントとは俺が話をつけておく」
「りよ、了解です！」

「こいこいこいこい!!」

虹のリングは一つに纏まり眩い光を放つ。
やがてその光が收まり、人型へと形をえていき、

『』

”それ”は現れた。

黄金と黒で統一されたスーツに悪趣味な高級時計のような印象を
受ける装飾。人で言うならば顔にあたる部位には、クラス名と思われ
る『ライダー』の文字が禍々しくあてがわれていた。

しかしながら、そこから放たれる威厳はこれまで出会つて来た『王』
とは一線を画すもの。

ただの『王』ではなく【魔王】
その場にいた全員が直感した。

……いや、雑務が忙しく、ここにはいない天才やドクター達にも映像越しに感じたことだろう。

あれだけ騒いでいた双子マスターもその迫力の前に沈黙せざるを得ない。

』

しかし、その原因であるサーヴァントも同様に押し黙っている。
「……なあ、どこの英靈だかしらねえが、マスターが目の前にいるなら一言くらい喋れってんだよ」

切り出したのはキヤスターのクー・フーリン。

自身が最も得意とする獲物は持ち合わせていないが、それでもこのサーヴァントが危険な思想を抱え、マスターに襲い掛かろうものなら迎撃する。

と言う意思をマスターを庇うように前へ出ることで主張した。

「あつ……！」

それを視界に捉えたマシユも停止していた思考を復帰させ大切な先輩を守るために、クー・フーリンの横へ並び立つ。

こちらも盾が召喚したサーヴァントの下にあるため充分な戦闘は期待できない。

（けれど、それでも……）

守るのだ。

『……ふむ。なるほど、状況は把握した』

「！」

言葉を、初めて口にした。

その内容は捉え方によつてはどう答えれば良いか分からず困惑していたかのように思えるが……。
どうなのだろう。

『私自ら語るのも良いが……他に適任がいる』

「そ、それはどう言う……？」

『奴は来る。私のいる場所に、必ずな』

マシユの疑問に答えると同時に、再び三つのリングが現れた。今度は虹ではなく金色に染まっている。

「……あつそつか、10回引いたからおまけでもう一回できるんだった」呆然としたまま立香が呟く。

「……ちと、やべえか…？」

このサーヴァントの言動が正しければ、敵か味方かわからない人物がもう一名追加されるのだ。決して顔には出さないが、内心冷や汗を流している。

そうこうしている間にもサーヴァントは召喚されてしまった。
マシユとクー・フーリンに緊張が走る。

「——祝え！」

が、それは空回りに終わつた。

ズツコケ、まではいかないがなんとも言えない。

「時空を超え、過去と未来をしろしめす究極の時の王者！その名もオーマジオウ！人理を修復するためルーラークラスにて現界した瞬間である！」

「ライダーではないのですか!?」

「……うちにも弓兵なのにバリバリ前衛で戦闘する奴はいるけどな」

一気に空気が弛緩した。

『やはり来たか、ウオズ』

「ええ、我が魔王。私は貴方に忠誠を誓つた身。何処までもついていくさ」

『……そうか』

「……そつちの祝つてたのにいちゃんはなんのクラスだ？」

かなり親しそうな会話であり、忠誠を誓うほどの家臣を持つている。

が、オーマジオウの名は聞いたことがない。

自分より後の世代だろうかと考えつつも、黒のストールを巻いた胡散臭い男：ウオズに話しかけ、彼は答えた。

「おつとそうちだね、私も召喚された身だ。一応の挨拶はしようじやないか。：私は名はウオズ、クラスはライダー。過去と未来を読み解き、正しき歴史を記す預言者だよ」

——歴史が消えても仮面ライダーは壊れない。

この人理修復の旅において、彼らの存在は予想以上の活躍を見せることとなるが、それは少し、未来のはお話。

じいさんは「飯を食べるようです。

「ねーリツカ。今日の種火回収どつちが行く?」

「んー昨日は立香がやつてたし俺が行くよ」

「ん、りょーかい」

マイルーム。

それは彼ら姉弟に与えられた個室である。

本来、別々の部屋が貸し与えられる予定であつたが、この姉弟はあらうことかゴネた。

「リツカと一緒にやないと…その、家事が…」

「立香と一緒にいないと…あの、癒しが…」

で、本音は?

「うちの姉（弟）を1人になると誰かに取つて食われるから!」「

なんだその自信（困惑）

恋人に盲目なタイプのマスター達である。

ちなみに冒頭の会話はお風呂で洗いつこしながらのものである。

……恋人かな?

いや恋人だろうと風呂を共にすることはそうそう無いはず……。

なんなんだこいつら（戦慄）

閑話休題。
それはともかく

「種火回収：必要だとは言え、皆には苦労をかけているよね」

「ああ。それも必ずしも自分が強くなるわけでもないのに…ほんと、感謝しかない」

泡を流して浴槽に浸りながらまじめ腐った顔で話し合う。

そもそも種火回収を何故行なっているのか。

それは、この双子マスター達はマスター適正があまり高くない事に起因している。

サーヴァントと絆仲_良く_{なる}レベルを上げるのは得意なのだが、最初に召喚した時点では能力が殆ど発揮できないのだ…。

たがしかし、それは逆に成長しないはずのサーヴァントに成長を促すキツカケとなつた。

特異点が発生した影響は大きく、歴史に大きな変化は与えないものの、^{エネミー}敵が発生した時代は多数存在する。

その時代にレイシフトし、エネミーを排除すると彼らはとある魔力の詰まつたアイテムを落とす。

それが種火。

倒したエネミーのクラスによつて、サーヴァントが育つ相性は変わが、どれも有用性が高いことには変わりない。

大規模な特異点修復に出ると種火回収はほぼ不可だが、そこは双子。

片方は特異点修復。

残つた片割れは種火回収をし、特異点修復をサポートするのだ。ちなみに種火は技術開発部が色々やりくりした結果Q.Pと同じく電力に変換が可能になつたため、特異点修復が休止の日でも必ず行う。

現状、カルデアの電力節約その他諸々の理由で特異点修復時以外はマスター1人とサーヴァント数名のレイシフトが限界のため冒頭の会話が起きたのだ。

しかし何故風呂場でこの話題なのだろうか……？（純粹な疑問）

☆☆☆

朝風呂から上がり食堂へ向かうマスター達。

「おー、賑わつてゐるなあ」

「そうだねえ…」

ザワザワと、それなりに広い食堂が賑わつていた。

カルデアの生き残りの職員が20名ほど。

双子マスターが召喚したサーヴァントが53名。

それぞれが談笑したり黙々と食べていたり、調理していたりと思い

思ひに過ぎていていた。

最近働き詰めのだったものが多かった
特異点3つを修復、オーバーワーク気味だつたカルデアは交代制で1週間ほど休みを取ることが決定したのだが…。

週間になつてゐるのだろう。

仕事が休みにでも寝過ごすことなく食堂に全員が揃つてゐる。

しかし、

全員が集合状態なのはそれだけが理由ではない。

「ねーリツカ。今日は何にする?」

「エミヤの日替わり定食!」

「だよね! エミヤ飯は最高にうまい!」

そう。

エミヤの作るご飯が美味しいから。

たつたそれだけのこと。しかし悔ることなかれ。

彼の料理はどの世代、年齢層にも受けがいい。

それが例え王様であろうと狼であろうと、万人に愛されているのだ。

「ブーディカさんおはようございまーす!」

「まーす!」

「はいおはよう。……君たちこのメニュー本当に好きだよねえ…エミヤの日替わり定食2つ、ますたオーダー入りましたーー!」

厨房の奥で『了解した』と言う声が返つて来た。

……食堂は食券制であり、食券機はエミヤの自作（投影）となつてゐる。

設定をいじり、お金を入れる必要を無くした為ボタンを押すだけで出てくるのだ。

そうして選んだ食券を副シェフに手渡し、呼ばれたら取りに行けばいい。

呼ぶにあたつて一人一人の名前を覚えておかなければならぬのだが、その辺、彼女は完璧にマスターしていた。

「毎日楽しみなんだよねーエミヤ飯! 私は特に漬物が好き!」

「渋いな立香! だけどすんごいわかる。滅茶苦茶わかる! あれはもうカルデアの遺産だね!」

だが、双子マスターはその場を去らずに囮々しくもそこで待つているのだ。

これは、双子マスターは知らされていないが、食堂において彼ら彼女らが訪れた場合は今までの調理を中断し、マスターオーダーを優先する暗黙のルールが存在するためである。

これは、まだ成人もしていないのに人類最後のマスターなんて重荷を背負わせてしまった申し訳ない、せめて食事の際は何不自由なくして欲しい、と言うカルデア職員の願望によつて定められたからなのだ。「……マスター。本人を目の前にして良くそのような会話ができるな」

そう言うわけで最高の定食を携えたエミヤが、自らをベタ褒めする場面に遭遇することもしばしば。

「あつ、照れてるー！」

「む、そう言うわけでは……まあいい。今回も最高のものを用意させてもらつた。存分に味わいたまえ。……食事前の手洗いを忘れるなよ？」

「うん！ ありがとうお母さん！」

「ありがとな！ 母さん！」

「誰が母だ！ ……こらー！ 食堂で走るんじゃない！」

はあーい！

と間延びした返事がはるか遠くから帰ってきた。

「あははは！ また言われちゃつたねエミヤ」

思わず目元を覆うエミヤに、副シェフのブーディカは思わず吹き出してしまつた。

「…あなたからもどうか言つてくれないか、ブーディカ」

エミヤはあまり人の本名を呼び名として話すことはあまりないのだが、ブーディカに押し切られて名前呼びが定着している。

「うーん、私が言つてもやめないとと思うな、あの子たちは。それに、エミヤがお母さんなら私はお姉さんつてことになるし」「さて、その理屈はおかしい」

「さ、次の人が待つてゐるし、もうひと頑張りだよ！」

「…………了解した」

詳しく問いただしたいエミヤだが、それを言われてはどうすることもできない。

(観念して厨房に戻るか…)

そう彼が踵を帰そうとしたと同時に。

食堂のドアが開いた。

(…見覚えのない顔だな。昨日掲示板で書かれていた御仁か?)

人数が多くなってきたカルデアにおいて、全員を集めるなんてことは時間の無駄遣い。

というかやることが多すぎてそんなことしてられないというのが現実だった。

現在は少し落ち着いてきたが。

そのため、

誰が召喚された等の情報は廊下にかけられたホワイトボードに記入されることで共有している。

エミヤはその掲示板を確認しており『オーマジオウ』とその家臣『ウォズ』がカルデアに来たことは知っていたが、片方は人間。もう片方は鎧を被った状態のため顔が確認できなかつたのだ。

そして、今食堂を訪れた2人の人物。

片方は全体的に暗いファッショング室内にも関わらずフードを被り、もう1人の人間の半歩後ろを歩んでいる。

そのもう1人は、謎の光によつて顔は隠されているものの、高齢者であることはなんとなくわかつた。

謎の光の高齢者…謎の高齢者は食堂をキヨロキヨロと見渡し、若干ソワソワしている。

「我が魔王。こちらで食券を購入するようです」

『…うむ。久方ぶりの”分からぬ”という感覚だつた。手助け感謝するぞ、ウォズ』

「勿体なきお言葉、ご光榮に預かります」

食堂にいる一部の人間はその様子を見ていたが、謎の高齢者が発する威厳を無視すれば、介護のような状態だつた。

「エミヤ?…どうしたの、そんなにジツ、とあのお爺さんを見つめて」
「……あ、ああ、すまない。今戻る」

エミヤにしては珍しく動搖したかのように厨房に戻ろうとしたが、ブーティカがその動きを、腕を掴むことによつて妨害する。

「…何か言いたいことでもあるのかね?」

少し苛立つた様子でブーディカを振り返らずに答えるエミヤ。

「ねえエミヤ。あのお爺さん、君が相手してみてよ。気になつていてるんでしょ？ 調理は私がやるからさ」

「なつ、何を…つ！」

「ほ～ら行つて行つて！ お客様、待つてるよ」

グイグイ、とカウンターに押し出されたエミヤ。

その反論を許さない迅速な動きに、エミヤは何もすることが出来ず引き摺り出されてしまった。

すぐ振り返り文句を言おうにも彼女はすでに調理を始めてしまっている。

「……やれやれ。全く仕方ない。こうなつた以上、職務を全うするかいやあんたの本来の仕事は戦闘でしょーがというツッコミはしてはいけない。

「やあ。君がエミヤくんだね、注文いいかな？」

「ああ。構わない。食券を渡してくれればすぐに用意しよう」

「では、これを」

黒いファッショングループの男が選んだのは『エミヤの日替わり定食』

「これでも結構美食な方なのでね。期待してもいいのかな？」

「…その挑戦、受け取させていただこうか。必ず貴方の舌を唸らせてみせる」

「ああ。楽しみにしているよ…では我が魔王。私は先に席を確保して待つていてるよ」

そう言うが早いが、黒ファッショングループの男…ウォズは一人でテクテク離れて行つた。

「待たせてすまない。注文を伺おう

ウォズを見送つた後、魔王と呼ばれた人物に向き直る。相変わらず謎の光が差しており眩しい。

『…ハンバーグ定食を所望する』

朝からキツいもの食べますね我らが魔王。

「…！ 了解した。直ぐ用意する」

『うむ』

眩しい光を放ちながら「こちらだ。我が魔王」とウオズに導かれて行つた。

「オーマおじいちゃん一緒に食べよ!」

なんか二人追加された。が、見て見ぬ振りをしながら彼はブーディ力のいる厨房の奥へと引っ込んでいった。

「……なんところで、あの人と全く同一の声を聴く事になるとはな」脳内に、忘れていた一人の男を浮かべながら。

☆☆☆☆

「お、その様子だと、うまく話せたみたいだね」

「……調理に私も加わろう。あの御仁がハンバーグ定食を御所望でな」「そつか。それなら、とびつきり美味しいのを作らないとね。久しごりに会つた人なんでしょう?」

「……なるほど、そう考えてあのような行動に出たのか……。残念だが答えはNO、だ。生憎と、あの御仁とは初対面でね」
「え、そうなの?……でも、その割にはなんだか複雑そうな顔をしているけど?」

「……ふ、なんでもないさ。ただ、あの声を聴いていると、妙に泣きたくなる。……いや、忘れてくれ。口が過ぎた」

「……うん。いいよ。あとでおねーさんがお母さんを慰めてあげる」「……母ではない」

☆☆☆☆

【s i d e エミヤ】

「お待たせした。日替わり定食とハンバーグ定食。熱いので気をつけるように」

『配膳、感謝する』

「ありがとうエミヤくん。……ではいまだこうじやないか……お手並み拝見させてもらうよ?」

「望むところだ」

食堂の一角。

共に食事をしていたマスター達はすでに完食をしていたらしく足

早に去つて行つたらしい。

これは後で聞いた話なのだが、遠目で私達のやり取りを見ていたらしく、邪魔するのも悪い、と思い直し少しの会話をした後ワザと退出したそうだ。

…気配りができると言うか、無駄に氣にしていると言つべきか。
まあ、それは良い。

今はこの御仁方に感想を聞かねばならない。
特にこの光る御仁には、な。

「おお…胃もたれしない程度にボリューミーな肉に、食欲を刺激する漬物…そしてこの白いご飯にお味噌汁…。中々やるじゃないか、エミヤくん。あ、ソースとつてくれ。あとおかわり」

「私は貴様の母親か！…だが、ご飯くらいならよそわせてもらおう。
ソースは自分の手に取れる位置にあるだろう…そら」

緑色の茶碗を差し出してきたこのウオズとか言う男に少し多めに盛つたご飯を返却してやるが、ソースはとつてやらん。

「ありがとう。…全くソースくらい取つてくれても良いじゃないか。
ケチだな君は」

「生憎と、急げ者にしてやれることはあまり無くてね」
会話が途切れる。

これ以上はご飯が不味くなると直感したのだろう。

ウオズは一つため息を漏らし、食事に戻つた。

(……さて)

私はメインの人物に目を向ける。

『……』

どうやら丁度ハンバーグを食べるらしく、肉を箸で食べやすい大きさに切り分け、口に運んだその瞬間、眩い光が霧散し御仁の素顔が明らかになつた。

目が死んでおり、意外とシユツとした白髪。

表情は薄くだが…これは…笑つて、いるのか？

『エミヤ、だつたか…』

「あ、ああ。どうかしたか？もしや口に合わなかつたのだろうか」

『いや…』

御仁はもうハンバーグを口にする。

ゆっくりと味わうように咀嚼し、嚥下。

そして、私に顔を向け…こう言つた。

『うむ、美味しい。素晴らしい手腕だ――――』

【うん、美味しい。士郎はすごいなあ――――】

「……………」

頭をよぎる、幸せだった日々。

そのうちの、俺が特に若く、じいさんに初めてハンバーグを作った日。

なにせ……辛いことばかりだから。

思い出すと、苦しくて、戻りたくて、でも、それは叶わないとわかつていて。

だからもう、

思い出すことは、ないと思つていたのだが……。

「――もつと、上手くなるさ。ずっと、ここにいたい、そう思えるくらいに」

気づけば、

あの時と同じような台詞を口にしていて。

『…どうか。それは、成長が楽しみだな』

御仁の返事を聞いた瞬間。
じいさん

……私の頬を、熱い、熱い何かが伝つて落ちた。

双子マスターのフレンドに救世主が来たようです。

「え…エミヤ、それ、本当に言つてる？」

カルテアの召喚ルームにて

俺は、一推しサーヴァントであるエミヤと一人で来ていた。

正確にはエミヤは呼び出されたらしいが

ああそうた
我が愛しのマヌタリよ
今日に限り
10連召喚を詠

俺がルームに入つ

卷之二

「う、嬉しいけど…どういう風の吹き回し?」

そう普段から飯経家でカルテアの備品の修理や掃除から調理までお手の物。

そんなカルテアのママは無駄に石を使つてはならないと常々口にしてきたのに、今日、いきなり解禁令がでやがりました。……ここまで急だと怪しくつて警戒してしまうだろう。

ターに対する呼び名か?」

え、そこ着目しちゃいます？

えええつと……どちらも、
テス

卷之三

「……割合は？」

目次

これ嘘ついたらoutだよね。

〔 3 : 7 〕

ふむ やはり10連は見送りに

それはマジ勘弁！いや、本当おあずけはダメだ！

…くそぅ！仕方ない！

なりふり構つていられないし、俺のカルデアで鍛えられた演技ひまわりの様な笑顔で誤魔化しにかかる！

「嘘嘘！100%だよ！エミヤの気持ちはすっごく嬉しいデス！」

やべつ、最後棒読みぽつといかもしけねえ！

「そうか！それなら仕方ないな！」

チョロいぞエミヤ？

こんな一般ピーポーに騙されないで！

いややつぱり騙されてて！俺10連引きたいの！

：つと、そういうえば自己紹介がまだだつたな。

俺の名前は純一郎。

カルデアの最後のマスターであり、平行世界のマスター達のお手伝いさんをやらしてもらっている。

なにせ：俺んとこのサーヴァントは少数にも関わらず気合とガッツがすんごいからめちゃんこ強い。

だからこんな特異点攻略中に余裕がある。

偶然知った平行世界のお手伝いができてしまう。

あと俺のマスター適正が高いのか、それとも何か概念的なのが働いているのか、最初からレベルMAXで召喚されるサーヴァントが何体かいいる。

エミヤもその一人だ。

「なあ愛しのマスター。10連を引かせる条件、と言つてはなんだが、今日、君の部屋で料理を作らせてもらえないだろうか」

「えつ……因みになに使うんだ？食材」

……そのレベルMAXで召喚されるサーヴァントの共通点2つあり、1つは『男』である事。

もう一つは…。

「フツ…食材などいらないさ。…何せ、必要なのは君を食べる（性的

に）ための下準備（穴をほぐす）だけだからな」

俺に、並々ならぬ性欲を向けるもの。

……紹介に補足させてもらおう。

俺は、何故か男サーヴァントにケツを狙われる運命に囚われた一般人マスターである。

……なんでさ。

まあ勤勉な観測者の皆さんなら、この俺がそんな頭のイッちまつた英靈をのらりくらりと躲していくような語り草だと察しているだろう。

そんな方々に1つお知らせがある。

俺は非処女だ。

既に掘られたあとなんだよ（事後）

はじめてはランスロットランスロットでありました。

しぬかとおもつた。

だからもう開き直つて楽しむことにした…と、いうわけでもない。

：一度……乱交みたいになつたことがあり…サーヴァントほど体力がない俺は…氣絶して…しまいまいましてね…？

それ以来みんな自粛してくれているんだけど…今日のエミヤみた

いに爆発寸前なんだ。

だから、何か、この状況で俺のケツを狙わない女性サーヴァントの切り札が欲しいのだよ。

……まあそのためにエミヤにケツを捧げるという犠牲は必要みた
いだけどネ（白目）

「ワカツタ。イイヨ」

「本当か…！…そうか…!!」

くうくよしつ！

と喜んでいるエミヤを尻目に俺は死んだ目でガチャを回す。れ
でいごー。

この召喚は初めてくるサーヴァント（または概念礼装）の場合のみこのルームに現れる。

それ以外は倉庫や応接間に飛ばされて、宝具強化やマナプリズム化、QP化される。

今回もその例にもれず7回目光を放つがこのルームにはなにも現れなかつた。

そして8回目……どうやら、神は俺を見放さなかつたらしい。

3つのリングが虹色に発光。星5確定演出！

（どうかっ…！どうか女性サーヴァントでありますようにつ…！）
さあ！お仕事ですよ神さま！

俺の願い聞き届けてください！

「サーヴァント『アーチャー』真名は【ゲイツ】救いを求める声に応じ参上した。：悪はどこにいる」

召喚されたのは男！神は死んだ！

しかもステータスレベルMAX！神は神でも疫病神であつたかチクショー！

…あれ？でもその割には俺に獣の様な視線は向けてこないな。

「……そいつか」

「ゲイツリバイブ！剛列！」

「ゲイツリバイブ！疾風！」

ふあつ！？

ちよ、宝具かなそれ？

「や、まつてまつて！もしかしてエミヤのこと言つてる!?」

「…ならどいつだ。俺が呼ばれたということは、滅ぼすべき魔王でもいるのだろう

「いやまあいるにはいるんだけどさあ！」

第4特異点の最後に出てきたソロモンとか言うやつとかね！魔神柱出してきたけど割と余裕で突破したのを見て少し面食らつてたお陰であまり脅威的な印象残んなかったけど!!

「悪は滅ぼす。それが俺の決めた道。例え相手が一番の友であつてもだ。…サーヴァントになる前のような甘さは捨てたつもりだが、万が

「一迷いが見えたのなら令呪を使ってでも俺を動かしてくれ」

やばい。なにがやばいってうちのメンツとの温度差がやばい。

多分この人生前、自分の使命を友達より優先させて倒しちゃつて、

それで英雄になつたパターンだ。

うちのメンツにもいるかもしれないけど、普段のムーブ見ていると
この人の覚悟との差が浮き彫りになつてて、やばい（語彙喪失）

「悪…か…」

あつ！正直怒涛の展開で忘れたけど、エミヤちょっと傷ついてるよ
！

め、メンタルケアは必要か？

「そういうプレイも…ありか…」

要らなさそうだなこのヤロー!!

心象風景風俗と化してそうだなこのヤロー!!!

オーマジオウはひ孫に甘いようです。

『…』の年になつて女子の部屋にお呼ばれするとは思わなかつたな…
正確には姉弟の部屋だが

「え、そうなの？意外。なんか、すぐやり手なイメージがあつたんだ
けど…」

『…そうだな、別の私なら、そういうこともあつたかもしけないが…』
「別の…オーマじいちやんにもオルタがいるの？」

『正確には別世界の、だが：確認できるだけでも大体20人前後くらい
はいる』

「そんなに！？」

カルデアの廊下。

そこは、生き残つた職員だけでなくサーヴァントも行き来する公共
の場。

人理焼却前から人が途切れないことで有名なその廊下で、とある人
物達が妙な存在感を醸し出しながら闊歩していた。

人類最後のマスターの片割れ女主人公と、謎の光が取れて普通のおじいちや
んになつたオーマジオウである。

もちろん通行人は彼ら以外にもいる。

しかし、マスターはサーヴァントとの絆を育むのも立派な仕事の一
つ。

故に、カルデア職員はよほど緊急でもない限りはサーヴァントと談
笑中のマスターとは話しかけないという暗黙のルールができていた。

「あ、おかーさん！」

「お、ジャックちゃん！どーしたの？」

しかし、それはあくまで職員内での約束事であるためサーヴァント
には関係ない。

むしろ一部（マスターLOVE過激派）は積極的に割り込んで新人
に釘をさしたりする。

その筆頭は清姫であるのだが…これはまた後ほど。
「あのねあのね！さつき種火をたつくさんとつてきたんだよ！」

「本当?」「苦労様! いつもありがとうございます。毎回周回メンバーだけど、疲れてない?」

「んーん! ゼンゼーン! 私たちは、おかあさん達のためならなんだつてできるもんね! それに、何回も解体できるからすつづくたのしいんだよ!」

「そつかー! もーかわいいなあうちの子は!」

「わっ、くすぐったいよお……えへへ」

突然立香に突進してきた露出度の高い子供。

この子は別にカルデアに元からいた誰かの子供ではなく、れつきとしたサーヴァントの1人なのだ。

最初はこの突進で転んでいた立香も、もう慣れたもので多少よろめく程度に収まっていた。

ここまでとはいつものカルデアの風景。

『…まさか、マスターはその年で子供を…? しかもそれなりに大きな…』

『?』

ちよつと違うのは、人の心が分からぬまま王様になってしまった平成の墓守がいたこと、ただそれだけである。

「え、いや、ジャックちゃんは私が産んだわけじゃないよ!」

『だがその子はマスターを母と呼んでいるが?』

「うん! おかげさんはおかーさんだよつ』

『そうだけど、そうじやないの!』

とてもややこしい。

「…我が魔王。マスターはまだ未成年だ。こんなに大きな子供が産まれるわけがないだろう? 彼女はサーヴァントだよ』

『ウオズ…。確かにそうだな、うむ』

見かねたウオズがフォローをしに来た。

明らかに呆れている。

しかし口元には笑みが溢れている。

2068年では常に張り詰めていないと行けなかつた為に、若き頃のような談笑が出来なかつたのだ。

もしかしたら、カルデアに来て少し昔に戻ったオーマジオウに感動しているのかもしれない。

『…そうだな、うん。子供か…』

「オーマジいちゃん？」

「おじーちゃんなの？なら、わたし達にとつてのひいおじいちゃんだねっ」

『おお…！うむ、うむ…』

「わ、我が魔王…いかがなされました？」

ズキューン！

そんな音が聞こえた気がする。

恋愛コンボでも入ったのだろうか。

いや親愛？どちらでもいいが。

『なら、ひいおじいちゃんとしてひ孫にはおもちゃをプレゼントしようか』

「は？」

失敬。

おじいちゃんスイッチだつたようである。

オーマジオウは懐に手を入れ…スッと何かを取り出した。

【ライドヘイセイバー！】

自己紹介どうもありがとう。

『音の出る武器おもちゃだ。時計の針を回せば色んな技が飛び出る。さすがにカルデア内では使つてはいかんが、シユミレーターや特異点では自由に使うのだぞ？』

「わつ、すつごい派手だね！ありがとう！」

「お、オーマジいちゃん…これ、本当にいいの？すつごい魔力を感じるけど…宝具なんじゃ…？」

『問題ない。それくらいならいくらでも出せる』

「我が魔王…」

まるで年金はいくらでもあるからなんでも買つてあげるよと孫に自慢げに話すおじいちゃんのようだ。

流石のウオズもこれには本気で呆れている。

しかしジャックもオーマジオウも無邪気に喜ぶので文句というか、小言を言うに言えない。

立香も立香で、やつぱりすごい英雄なんだと戦慄を隠しきれない。

「あのねあのね、ひいおじいちゃん、おねがいがあるんだけど…」

『なんだ?』

「わたし達をたかいたかーいしてほしいな！」

『それ程度なら、いくらでも』

「わーい！」

しかし、目の前に広がる光景は孫と祖父が戯れる微笑ましいものだ。

——カルデアは今日も平和である。

姉マスターは壊れているようです。

マイルーム。

それはカルデアに住み込みで働いている職員のために用意された個室の事である。

個室といえば、所有者が外ですり減らしたメンタルを回復する数少ない癒しの場でもあるのだが、カルデアに届く物資は少ないと、趣味で埋もれているマイルームはほとんどない。

ただし一部の部屋では男の娘の写真で埋め尽くされたり、マスターの写真が天井に貼り『マスターがずっと私を見ている……』と悦に浸るような特殊な人たちがいるのだが……。

姉の方のマスター、

立香もその一部に含まれていた。

「さ、はいってはいって！」

オーマジオウは、少しばかりドキドキしていた。

若き頃では人付き合いはそれなりにしていたが、友達ではなく民との触れ合いの側面が強かつたために、誰かの家へとお邪魔したことがなかつたからだ。

『お邪魔する』

「うん、どうぞどうぞ！」

故にオーマジオウは気付かない。

壁一面に男主人公の写真を引き伸ばして貼り付けられているのが異常だと。夜中2時を回つてお呼ばれすることの非常識さを。これが女のお子の部屋かあと、香気に考えているのだ。

「ねえ、オーマジいちやんつてさ、聖杯を手に入れたらどうするの？」
『聖杯……。そうだな、何か願うとすれば、より良い時代が来ますように……だな』

英靈によつては重たい質問もコミュ力お化けな立香は相手に不快感なく聞くことができる。

……が、どう考へても最初の一歩でドン引きされているのでドラマイロどろかマイナスに舵が切られてしまうのだ。

そしてこの部屋を訪れた英霊の7割が同部屋のリツカを慰めに行くまでがセット。

因みにリツカによると、実家にいた頃はこんなことをしてはおらず、今よりはボディタッチも少なかつたそうだ。

人理修復という重荷。

それをストレスに感じない訳がなく、溜め込めばいざれ自滅する。彼女のメンタルケアを行うドクターからも『なるべく好きにさせていた方がいい』と進言されたこともあり、リツカは立香を咎めることはしないそうだ。

【大事に思われていることは嬉しいし、オレが立香の…姉ちゃんの支えになれてるなら本望…まあ流石にあれはドン引きだけど】

とは本人の弁である。

「じゃあ好きなものはなに?」

『好きなもの…誰かの思いがこもった料理は好きだ。中でも、育て親が作る種類が好ましい』

「ほうほう…俗に言う母の味というやつだね!」

立香の目をよく見るとわかるが、彼女の瞳に光はない。

普段は照明器具のお陰で誤魔化しているが面と向かって対峙するとよく分かる。

彼女の精神は最初の冬木の時点では碎けていたのだ。

「それなら嫌いなものは?」

『人の死を笑う者は、絶対ゆるさねえ!』

「そつか…うん! そうだよね!」

辛うじて戦い続けられているのは、弟の存在があつたからだ。

それもそうだろう。

昨日まで普通の生活をしていた未成年が、いきなり命の危機に見舞われ世界を救うという使命を与えられて耐えられる訳がない。

姉として守らなくちゃいけない、と己に言い聞かせて漸く奮起ができたのだ。

そしてそれを継続するためにはガス抜きとしての趣味が必要になる訳だが…カルデアに持ち込める道具は非常に少なく、弟と絡むくら

いふ

いしか心の安らぎがない状況は、普段からブラコン気味だった立香のブレークを完全に壊した。

一番身近で、一番自分の事をわかつてくれて、一番大事な弟の存在がどんな危機的状況でも彼女を奮い立たせる。

逆にいえば、リツカがいなくなれば彼女は立つことすらままならないくなるということもある。

ただ、性的欲求は全くない。

感覚的にはアイドルオタクが『あの子がいないと生きてけない!』と言っているようなものだ。引退したら絶望する。

……事の重さが桁違いではあるが。

「そういうえばオーマジいちゃんつていつの時代の英靈なの?」

『平成だ』

「えつ、うつそ同世代!?」

ここまで立香が笑えるようになつたのも、第3特異点を攻略し終わつてから。日々メンタルケアを行うドクターと立香、リツカの努力の賜物である。

「あー楽しかった…あ、そうだ、一つ提案があるんだけど、いいかな?」「なんだ?」

『最終再臨の姿になつてみてよ』

『かまわんが…フツ!』

既に聖杯は捧げられていないものの最終再臨は終えていたオーマジオウは、諸葛孔明もとい、ロードエルメロイⅡ世よろしく若き頃の姿に変えることができる。

しかし、何故いきなりこのようなことを頼むのだろうと不思議に思いつつも、オーマジオウはマスターの要望に従い姿を変えた。

「ありがとう!…ところでさ、カルデアの電力による魔力供給ってちょっと味氣ないとと思わない?」

ん?

『味…?いや、魔力にそんなものはないだろう』

生前、魔力は仮面ライダーウィザード関係でしか関わつたことがないオーマジオウ。

その力を継承した影響か、攻撃に使つた魔力は回収できるのでむしろ有り余つてゐる。

なので、カルデア所長代理には魔力供給は1週に3日ほどで良いと伝えるほど。

なので味がどうこう言われてもピンとこないのだ。

「おつとまさかの無知シユチユ。これはなかなかオツですね」

ギシツ

ベッドが軋む。

『マスター。何故私をベッドの隅に追い詰める?』

「大丈夫大丈夫。みんな病みつきになるからね…天井のシミを数えていれば終わるよ」

『お前は一体何を言つてゐるんだ』

：彼女の弟に対する思いはとんでもない方向へと向かつてゐる。
推定人類悪レベル。

そう！彼女はカルデアのサーヴァントと男女問わず性的関係を結んでいるのである!!!!

それは『弟とマシユをくつつけるために、しようがいとなり得るもの全てを取つ払つてやる!』というおもいから！

つまりはみんな私に夢中になれば2人はくつつくしかないよね！
という事である！

……いやどういう事だよ！

『令呪を持つて命ず！私に全てを預けて！』

『お、落ち着けマスター！』

【見せられないよ！】

☆☆☆☆

『……と、いうことがあつたんだ。みんなもマスターには気をつけるのだと』

『『りよ、了解』』

オーマジオウは全てのオーマジオウと情報をリンクすることが可能である。

別世界の自分とのチャットができるのだ。

その情報を見た、境遇が非常に似ている双子マスター・カルデアにいるオーマジオウは冷や汗をかいた。

（私もこれからお呼ばれするのだが…大丈夫だろうか…？）

朝食が終わって移動し始めたばかりなので大丈夫だとは思うが、やはり心配なものは心配だ。

「オーマジいちやんどうしたの？」

『いや……なんでもない』

（そんなまさかな）

本をパタンと閉じるようにその考えを断ち切つたオーマジオウ。

それと同時にマスターの部屋へと辿り着く。

「さ、入つて入つて！」

『ふむ、お邪魔しよう…』

どうか違つてくれますように、と願いつつオーマジオウはマイルームに入り込んで――。

おつと。

どうやら今回はここまでのようにです。

この後我が魔王がどうなったかは、皆さんの想像に任せるとします
しょう。

それでは、いい夜を。

夏休み特異点【駄菓子屋オーマ】

- › 村の外れに着いた。
- › 道路は途切れているが土の道が続いている。
- › さらに進みますか？
- › 『はい』『いいえ』
- › 道なりに進むと、
- › 突き当たりにポツンと一軒家が建っていた。
- › 立て掛け看板には【駄菓子屋オーマ】という文字と
- › 2頭身のカラフルなキャラクター達が、20人ほど
- › 描かれている。
- ……む。
- 弟の方のマスターか。
- 私の店によく来たな。
- › 駄菓子屋と思われる店から顔に赤い文字で
- › 【ライダ】と書かれている金の甲冑を着た人物が
- › 話しかけて来た。
- 不思議そうな顔をしているな…。
- もしや私のことを忘れてしまったのか？
- › あなたは首を傾げる。
- › 『少なくとも、
- こんな凄みのある甲冑を着た人は初めて見た』
- ……うか。
- › 『あなたは何者？前にあつたことがあるの？』
- ……私が何者かは、いずれ思い出すだろう。
- それまでは、普通の老人として接してもらえるとありがたい。
- › 『ここで何をしているの？』
- 見ればわかるだろう？
- 駄菓子屋経営だ。
- 駄菓子屋といつても、
- 液体のりやハサミなどの文房具も扱う、田舎特有の何でも屋のよう

なものだがな。

〉『…その格好で？』

『…暑くないの？』

仕方ないだろう。

なにせ、この特異点では特定の人物に強い縛りの【役割】が与えられるのだからな。

お前たちマスターが、10代に届かぬ程度の子供になつてているのと同じだ。

私はこの通り【駄菓子屋の店長】なのだが…。

その影響か、

何故か変身が解除出来なくなつていてる。

〉『よくわからぬけど、それ大丈夫なの？』

ふ、心配には及ばない。

何せ、

生前も歳を50重ねた頃合いから落ち落ち変身も解けなくなるほど体にガタが来ていたのだからな。

むしろ、この姿の方が健康的なのだと？

〉『そつか…』

『なんか生々しい…』

ところで、ここは駄菓子屋だが……マスターは何を求める？

ライバル店であるインドマートやコンビニエンスストアに比べると品揃えは劣るが……品質では最高最善最強だと約束する。

……QPは頂戴するが。

そのような目で見るな。

そういう役割なのだ。諦めろ。

〉何を買おうかな。

〉右クリックで解説が聞ける。

『すごい虫取り網』 1000QP

『すごい虫取り籠』 800QP

『すごい釣竿』 1000QP

『食用のバナナ』 200QP

『魚のエサ』300QP

『お菓子の詰め合わせ』500QP

『マツドドクター（使い切り）』8000QP

『タカウオツチロイド』7500QP

次のページ>

>『すごい虫取り網』

それか。

それは若き日の私がよく使っていた虫取り網を様々な手段で強化したものだ。

通常の虫取り網では使うごとに耐久値が減少するが、その虫取り網に減少は無い。

：だが、流石に武器として扱えば耐久値は減る。
正しく扱うことを探るぞ。

因みにだが、私が直々に強化した日用品や遊び道具などのものには、商品の名前に『すごい』という名称をつけている。参考にするといい。

>『マツドドクター（使い捨て）』

全身に凄まじい痛みが走り、精神力が少し減るが、体力を全回復させることのできる車型アイテムだ。

本来なら使用制限は存在しないのだが…。

この特異点ではどうしても縛りが効く。

一人につき一つまでが所持の限界となっている上に割高となつているが、効果は抜群。

体力のほかにも、例外を除き毒や病気なども治療できる優れもの。扱いどころを見誤ることのないようにすることだ。

>『タカウオツチロイド』

誰かを捜索する際に使うといいだろう。

空からの索敵も可能だ。

重さにもよるが、何か一つ荷物を持って運ばせることもできるよう

に設定されている。

持ち運びに制限はない。

存分に購入するのだぞ？……冗談だ。

☆☆☆☆☆

- >『すごい虫取り網』×1
- >『すごい虫取り籠』×1
- >『すごい釣竿』×1
- >『食用のバナナ』×3
- >『魚のエサ』×3
- >『マットドクター（使い捨て）』×1
- >『タカウオツチロイド』×2
- >以上を購入しますか？（27300Q.P.）
- >『はい』『いいえ』
- >『いっぱい買つた！』
- >『少し重い…。』
- >自宅に帰るまでの移動速度が減少した。
- …マスターよ。
- 少し…いや、かなり重そうだな。
- >『これくらい平気だよ！』
- 『うーん、結構辛いかな…』
- ふ、マスターも男の子ということか。
誰かに弱みを見せまいとする姿勢は大いに結構。
しかし、だ。
- >駄菓子屋オーマの店長は
- >あなたの荷物を半分強奪した。
- >移動速度が元に戻つた！
- 1人で全てやろうとするな。1人で全部出来てしまつと、仲間がいる意味が無くなる。
そのまま突き進んだ先に待つのは孤独だ。
…私がその例だな。
- >『店長は1人じゃないよ』
む？
- >『だつて、俺が一緒にいるからね！』

。| | |

♪『話は難しいけど、ようは孤独になるなつてことでしょ？なら俺、それはすつぐく得意だし！：俺は弱いけど、その分いっぱい助けてくれる仲間ができたんだ。だからさ、店長も、その助けてくれる人の中に加われば…ほら！もう1人じやなくなつた！』

♪お前は面白いな、リツカ。

確かにリツカなら孤独にならないだろう。

♪…なら、私もリツカが1人にならないよう、王として、店長として手助けさせて貰おうか。

♪『うーん。それって友達としてじゃダメなの？』
なに？

♪『なんか、王様だとか店長だとかじや少し遠い気がするんだよね！だからさ、本当の1人ぼつちにならないように！友達になろうよ！』

友達…！

友達か…！

♪『駄目かな』

そんなことはない。

フフツ：いいだろう！

今日から私はリツカの友となつた！

これからよろしく頼むぞ？リツカ。

♪駄菓子屋オーマの店長と友達になつた！

♪お昼はお店があるから閉店してから遊びに誘おう。

♪夕方行動メンバーにオーマジオウが加入しました。

♪夕方に駄菓子屋オーマを訪ねることでオーマジオウをパーティに加えることができます。

【日記】

その後は、そのままオーマジオウに半分荷物を運んでもらつて帰宅した。

頼光お母さんとジャンヌお姉ちゃんに紹介した。
何故かオーマジオウが俺のおじいちゃんになった。
オーマおじいちゃんが我が家に住むことになった!
なんでえ!?

幕間の物語

トリニティ。①

「トリニティマー？」

「そう！リツカ君ことマスターとマシユと最初にマの付く英靈……3人の”マ”力を結集させる礼装が完成したのだよ！」

「ちょっと何言つてるかわかんないっすね」

夜中0時。

普段のオレはこの時間帯はぐっすり眠っているはずなんだけど、目の前で酒瓶に囮まれながらニッコニコなモナリザ顔の天才に緊急連絡を受けたため、飛び起きカルデア制服に袖を通し迅速に工房にやって来た。

：よく見てみると、ダヴィンチちゃん以外にも寝転がってる共犯者もいるようだが…意識はないみたいだ。
〔…かなりお酒、飲みましたね〕

いつも物が散乱しつつも清潔感はあつた工房がみる影もない：ついでに酒臭い。

エミヤと婦長さんがブチ切れする案件じゃないかなこれ。健康に害を与えるような暴飲暴食はあの2人大嫌いだし。

「なにおー！この天才が、酔っ払つてるとでもいうのかー！」

「キヤラ！キヤラ崩れていることに気付いて！」

「ふつ、既存のものは新しい法則の前に崩れ去ることもあるのさ。わかるかい？」

「わかりません。で？礼装がどうのこうの言つてましたがなにができるんです？」

これ以上は時間の無駄になりそうな予感がする。

幸い明日は休日と設定されてるから問題ないけど、健康のためにも早く寝ておきたい。

なにより、寝坊したらエミヤのご飯が食べられなくなる。それだけは絶対に嫌だ。

そういうわけでサツサと切り上げるのが吉。

本題を早く言うように催促する。

「むーつれないね。ま、いいさー！今日はそれが主題じゃないからね…
という訳で（ガサゴソ）」

なんか酒瓶の山を漁りだした…。

「じゃじゃーん！ジクウドライバー！」

「!?」

ファツ？

最近召喚したゲイツが持つてたやつ！

「ちょ、ちょっと待つてなんでダヴィンチちゃんそれ持つてるの!? て
いうか作つたのそれ!?」

「天才に不可能はないからね！ ウオズ君に実物借りて変身システムも
完全コピーして見せたとも！ 外見だけだけどね！」

「すごい！ さすが天才！ 酔っ払いでもその頭脳に狂いはなかつた！」

「当然のことわざわざありがとう。でも中々どうして嬉しいものだ
ね、これは」

オレがちょっとオーバーに褒めると、お酒で赤くなつていた頬をボ
リボリかいて照れた様子を見てくれるダヴィンチちゃん。

かわいい。だが男だ。

——しかしそれがいい。
——ちくわ大明神。

誰だ今の。

なんだ今の。

「しかしだ、今の時間にこんなことをやつてしまつているのだから、お
説教は確定だよねー」

「まあ、当然なりますけど…何かあつたんです？」

ダヴィンチちゃんがここまで酒に溺れるなんて初めて見た。やつ
ぱり事務作業が多すぎてストレスになつてているのだろうか？

「むふー！ 実はね、ちょっとした寝酒のつもりで私の美しさをつまみ
に飲んでいたら…なんと、止まらなくなつてしまつたのさ！」

「大丈夫？ お医者さん呼ぶ？」

「おつとそれは勘弁だ。治療（物理）されてしまう……あと、そこの酒瓶の山の下にお酒を試しに飲んでみたらぶつ倒れたエリザベート君が埋まっているから助けてあげて」

「なにしてんのエリちゃん!」

エリちゃん：アイドルがお酒に飲まれたらいけませんよ…マネージャーとして起きたらお説教です！

：と、取り敢えず引つ張り出さないと。

ダヴィンチちゃんは予想以上に酔つ払つているのかずつと笑つてばかりで手伝つてくれなさそうだし、一人で頑張るか。

「…てかサーヴァントが気絶するつてどんでもないものよく用意しますね…」

酒瓶を整理しつつも、ふと疑問に思つたことを投げかけてみる。
あ、髪の毛が見えてきた。

エリちゃん！

「なあに、君が周回で稼いだ素材をチヨチヨイと拝借…あつ
「はい？」

おつと、お説教相手が増えたぞう。

エリちゃんを引っ張り出しながら、ダヴィンチちゃんに顔を向ける。

「ま、待ちたまえリツカ君。君は今、冷静さを欠いている…ちよつとした出来心だったのさ…お詫びに呼あげるから許して?」

「……もう

しようがないなあ…。

ダヴィンチちゃんも疲れてたみたいだし、オレの苦労が少し増えるくらいだからまあ…。

「さあて今日はお開きとしようか。効果の程は、明日試してもらうとしよう！あ、ウオズ君は私に任せて

「了解。おやすみなさいダヴィンチちゃん」

「おやすみ、いい夢を」

その日はエリちゃんを立香のベット（本人は特異点攻略中）に寝かせ眠りについた。

☆☆☆☆

——王様になる。

原点は小さい子供の時の夢。
時には馬鹿にされ、まともに考えるとも言われた。
しかし、私の意思は曲がることなく突き進む。

——変身！

始まりの日。

化物が民を襲い、私は助けようとしたが…あまりにも無力であり、
あつさりと目の前で命が奪われてしまった。

そんな時、傍にライバーが自然と現れて…流れのままに変身。
これ以上の犠牲が出ないように私は戦い、正義の味方の力を継承し
た。

次に、病氣で苦しむ民を助けようとして再び化け物と戦い、ゲーム
の力を継承した。

その後も幽霊や魔法、ライダーなのに車の力を継承したり、他ライ
ダーと強敵が戦っている謎の空間に単身で乗り込み撃破し、その時空
の正義の味方と邂逅したりと…語りきれない出会いがあつた。
そして別れは突然だつた。

19人のライダーの継承が終わつた途端…クオーツァーなる組織
が平成を否定し、今まで継承して來たと思つていたライダーの力は実
は奪つて來た物だと知らされて……。

それでも諦めまいと戦つている最中に…最悪の事態が起きた。

——おじさんッ！しつかりして！おじさん！

目の前で、今まで自分を大切に育ててくれた人を亡くした。
それも、私を守る形で…。

——事情はまるでわかんなかつたけど…体が勝手に動い
ちゃつてね…無事でよかつた。

私は…。

私は…つ！

私はツ！

『祝福の刻』

祝つてくれる人なんていない。
たつた今日の前で死んでしまったから。
なのに、ベルトの声がいつもと違つて、おじさんのように聞こえる
のは何故だろう。

……結果として、クオーツァーの幹部の討伐は一人取り逃がした事
以外は成功した。

しかし、対応が遅すぎた。

世界の人口は半分となり、世間は私を魔王と呼んで攻撃を始めたの
だ。

話し合おうにも聞き入れてもらえず、やむなく武力行使に出るしか
なかつた。

：取り逃がしたクオーツァーの幹部が裏で情報操作したのだと気
づいた時はもう味方はいない。

私は孤独の魔王として世界に君臨し続ける。

たまにくる地球外からの侵略者の排除やレジスタンスを撤退させ
る生活を、気づいたら50年近く経つていた。

変わつたこともある。

ウオズと名乗つた家臣ができた。

隙とも言えない隙についてライドウォッチをレジスタンスの1人
に奪われた。

この二つの出来事には本当に驚かされ、今でも鮮明に思い出せる。
しかしながら、50年で鮮明なのはこの二つの程度。

我ながら良く持つたなと思う。

私が耐えることのできたこと…それは、奪つてしまつたライダーた
ちへの贖罪の面が強く、誰も覚えていなくても私が覚え続けること
で、誰の記憶にも残らない…なんてことにはさせない為だ。

……いわば『平成の墓守』と言つたところだろうか。

……レジスタンスが過去に行くと知つた時、なんて無駄なことをするのかと疑問を抱いた。

過去の自分なら倒せるという根拠はどこから湧いてくるのが、本気でわからなかつた。

故に見逃して様子を伺う。

するとどうだ。

過去の私が私の知らない力で私に膝をつかせたではないか！

……いや、時系列は逆だつたか？

なにしろ、私の出来事なのか共有した出来事なのか年々判別がつかなくなつてきている。

まあ、それは置いておく。

重要なのは、過去の私が違う未来の可能性を見せてくれたという事。

そして、成し遂げて見せたのだ。

若き日の私は、私という物語を受け継ぎ、20人のライダーを継承し、真の最高最善の王へと『変身』した。

嬉しかつた。

漸く、私たちは前に進むことができたのだ。

もう、思い残すことはない…。

が、それはそれとして地球の危機には参上しようと思ひ『座』に登録される次第となつた。

私が呼ばれるということは、最低でも人類の危機ということだし、気合を入れ召喚を待つた。

そして、時は來たる。

私を呼ぶ声に導かれ：眩い光に包まれて――。

☆☆☆☆

「子イヌ？起きなさい！」

「ツ!?

目が覚めた。

変な汗がビツシヨリと体を濡らしている。

「エリちゃん…おはよう。一日酔いしてない?」

「サーヴァントなんだから大丈夫に決まっているでしょ、そんなことより着替えてらっしゃい! アイドルのマネージャーが汗臭いなんて許さないんだから!」

「ごめんごめん…、じやあ着替えてくるから」

着替えを持って脱衣所へと向かう。

ついでにシャワーも浴びよう。

「つて、なんで私子イヌの部屋で寝てるのよー!?

「……」

説明めんどくさくなりそう。

まあいいや。

「…オーマじいちゃん。報われたのかな」

本人そう言つてたし、話に出ていたっぽいゲイツは召喚できた。
けど、あまり話している様子がないんだよね。

「ちょっと聞きに行こうかな」

レイシフトメンバージやなかつたはずだし、カルデアの何処かにいるはず。

なら善は急げだ。

オレはさつさと全裸になりシャワーで汗を流し、タオルで体を拭こうとして――。

「ちよつと子イヌ! なんで私貴方の部屋、で寝て……」

「あつ……」

「えつ…!」

――その日、カルデアに二つの悲鳴が響き渡り、一部機械が壊れたそなだが、オレは何も知らない。